新書紹介

道路の経済学

高橋 清 著

東洋経済新報社　B 6 版 183頁
480円

道路政策のメカニズムをするどく解明する

道路の建設技術上での進歩は目をみはるものがある。そしてその基礎となる工学上の研究は急速に進んでいる反面，道路それ自体の社会科学的な研究はいちぢるしくたちおくれているといえよう。

この本は，人間がつくった道路が人間をおしのけてしまうという現実を，経済学的に解明しようとしたものである。そして財政的なするどい分析によって，この試みは十分説得力あるものになっている。

道路に対する基本的な考え方についてはつぎのようなことをのべている。

「昭和30年代の公共投資は，社会資本の生産資本に対する『たちおくれ』意識でつらぬかれてきた。だから道路投資はその一番たちおくれているところ，すなわち交通量の多いところから重点的に着手されていったのである。しかし，そのような交通量主義という『たちおくれ』意識だけを投資基準とした結果は，金をつぎこむほど混雑するという状態になっている。すなわち自動車の生産台数と道路整備の差は広がる一方なのである。

そこで，道路という社会資本に対する考え方をもう一度検討しなければならない。道路には同時にいくつかの機能があり，そのなかのどの機能に重点をおくかで道路からうける利益や不利益のとらえ方も異ってくる。日本ではこれまで，道路建設に際して費用便益概念が適用されている。そのやり方では道路のもつ社会的生産手段としての機能だけにしぼられてしまうことになり，しかもマイナス面についての考慮はほとんどなされないありさまである。

それでは道路の投資効果を測定するために，なにか客観的で統一的な基準を理論的に求められるかというと，それはまったく不可能に近いのである。それは理論の問題ではなく，すぐれて政策の選択なのである。」

国の政策が貫徹する日本全体の道路投資の激しい動きのなかで，道路づくりにおける自治体の積極的役割とはなにかということを改めて考えさせられる本である。

＜S＞

あとがき

15号につづいて，今回も「行政の再点検と提案」の特集です。とりあげた行政は前回とあわせて11。もちろんすべての行政を網羅しているわけではありませんが，いろいろなタイプの行政の現状と問題点がこれでかなりはっきりしたように思います。個々の提案も，学識経験者のコメントも，今後大いに役立てていきたいものです。ご執筆下さった方々にあつく御礼申しあげます。

○

さる10月22日に「一万人市民集会」の総会が開催されました。9月24日から始まった四つの分科会の総決算にふさわしい盛況でした。とくに分科会では，集まった市民は時間をかけていろいろな角度から活溌に市政を論じ，市政に対する期待と関心の深さを示しました。

行政の再点検も提案も，役所側の都合本位ではたいして意味がありません。受け手である市民の立場にたって行政を考えることの必要を改めて感じました。

○

「行政資料」に掲載した公害の提言は，昭和39年の学者グループの提言につづくもので，横浜方式を一歩進めたものです。15号の清水教授の論文と併読していただければ幸いです。＜N＞

調査季報

16

1967年11月30日

編集・発行——横浜市総務局行政部調査室

横浜市中区港町1—1

印刷——有限会社　宮村印刷所

横浜市南区永楽町2—22